

ペットとロボット

正田 陽一 (CAIRC 会長)

以前、星 新一だったかの、こんなショート・ショートを読んだことがある。

——動物園の檻の前で、藪入りの休暇の小僧さんがノッシ ノッシと歩くゾウの姿をじっと見つめている。ゾウはロボット……ここはロボットの動物ばかりの動物園である。

小僧さんが呟く。「いいなあー ご主人の坊ちゃんは今頃「ほんもの」の動物園を見ているんだろうな」 その時、小僧さんの手提げの中のベルが「ジリリリ…」と鳴る。小僧さんロボットの休暇の一日の終了を告げるベルが——

遠い未来の話と思っていたこんな風景が、現在、畜産の世界でも徐々に広がって来つつあるのである。

先日、岩手県の試験場で「全自動搾乳ロボット」の作業ぶりを見学した。雌牛が飼槽の前に立つと、乳房に消毒液が噴射され、乾いたタオルで優しくマッサージ、そして搾乳機が近づいて、4本のティートカップがセンサーの働きで4本の乳頭にぴったりと吸いつき、モーターの拍動に合わせて吸乳、終わると機械は自動的に外れて、牛は歩み去る。

まだ試行の段階らしく、一人の技術者が傍らに付ききりで見守っていた。

酪農家には1年中休日がない。カソリックの教えの厳しい国では、搾乳を機械化することで安息日を守ることは、たいへん重要な意味を持っているのである。

トラクタなどの機械力が田畑から牛馬の姿を追い払い、労働する人間にはロボットが取って代わる。機械化の進展はこれからも止まること無く続くことだろう。

でも家畜の役割の中でペット・コンパニオン・アニマルの仕事だけは機械にさせることは難しいだろう、と思っていたら、先日の新聞に「ペット・ロボット」の話題が出ていた。

考えてみると、餌を食べないペット・ロボットは排泄もしないから清潔で悪臭も無く、うるさく鳴いて近所に迷惑をかけることも無い、集合住宅に棲む独居老人のコンパニオンとして役に立ってくれることになるのかもしれない。

終

著者注：CAIRCは、Companion Animal Information Research Centerの略です。

編者注：正田陽一さんは、東京大学農学部で畜産の教授の傍ら、動物園ボランティアの育成に力を注がれ、現在、名誉教授で東京都動物園協会の理事などもされています。